



市町村のまちづくり

# 【常総再生へ若い世代が動く】 高校生によるまちづくり提案

—平成27年9月関東・東北豪雨水害からの復興に向けた取り組み—

～常総市～

常総市企画部企画課 課長補佐 西村 聡

## はじめに

平成27年9月関東・東北豪雨の影響により発生した鬼怒川の水害に際しては、近隣自治体の皆様をはじめ全国の皆様から様々な形で温かいご支援を賜り、心から感謝申し上げます。

## 事業の背景

関東・東北豪雨では、本市のほぼ中央を縦断して流れる鬼怒川をはじめ、市域を流れる多くの河川が増水。溢水や堤防の決壊により市域の約3分の1が浸水するという大災害となりました。



この災害による住家被害は、全壊53件、大規模半壊1,581件、床上浸水までを含めると5,283件にのぼり、居住不能になった住家からの転居などにより、かねてから課題となっていた人口の流出が加速しました。また、商業施設についても、復旧費用等の問題から撤退も見受けられる状況でした。

被災による不自由な生活や将来への不安などから、住民は疲弊し、まちは活気を失ってしまいました。このような状況を打開し、一日も早い復旧・復興を実現するため、市は常総市復興計画を策定しました。復興の基本方針には、「若い世代が牽引し市民の笑顔を引き出す復興まちづくり」、「復興にあたっては、市民から常により良いアイデアを取り入れていくこと」などを掲げました。

今回ご紹介する取り組みは、この基本方針を踏まえ、将来を担う若者の声を聞き、高校生ならではの発想を復興と地方創生に活かすと同時に、高校生が市の再生に真剣にそして楽しく取り組んでいる姿で、市民の笑顔と市の活気を取り戻したいという考えからスタートしました。

## 事業概要

本事業は、復興計画策定委員会の委員長でもある筑波大学システム情報系社会工学域の大澤義明教授の発案に

より、大学が推進する高大連携の枠組みに市を加え、高・大・官三者連携事業という形で実施しました。

本市には、水海道第一高等学校、水海道第二高等学校、石下紫峰高等学校という3つの県立高校が立地しています。筑波大学と市で連携し、これら3校に赴いて参加者募集の説明会を実施し、それぞれの県立高校から15名ずつの参加者を募り、計45名の有志生徒による3校混合チームを結成しました。45名の高校生は8つのチームに分かれ、それぞれのチームに与えられたテーマについて議論し、その結果をプレゼンテーション資料にまとめ、市長に対してまちづくりに関する提案をしました。

また、ここで発表された提案は、水害からちょうど1年後にあたる平成28年9月10日に地域交流センター（通称：豊田城）大ホールで開催した「常総市復興祈念まちづくりシンポジウム」や筑波大学で学園祭時に開催された「高大連携シンポジウム2016」で発表しました。

### 【共通テーマ】

常総市の歴史や文化などの特徴を踏まえ、現代の課題を発掘し科学的な分析手法を交えながら、常総市の将来を考え、まちづくりを提案する。

### 【各チームのテーマ】

- 1班・2班 自然・歴史・文化による活性化プラン
- 3班・4班 安全・安心の地域づくり
- 5班・6班 戦略的ブランディング計画
- 7班・8班 若い世代の心をつかむまちづくり

## 〇ワークショップ

ワークショップは高校生の夏休み期間中に実施し、最終日に行う市長へのプレゼンテーションに向け、活発な議論が繰り広げられました。

事業の実施にあたっては、企画段階から大澤教授を中心に筑波大学社会工学類や社会工学専攻の学生の皆さんに全面的にご協力をいただき、市は会場や参考データの提供などを行いました。

高校生は、まち・ひと・しごと創生本部が開発した地域経済分析システム（以下RESAS）による分析、まち歩きによる現地調査、KJ法による課題等の整理とアイデア創出の実践、パワーポイントを使った資料の作成、さらにはプレゼンテーションのスキル等について、筑波

大学の皆様の熱心な指導を受け、学校の授業とは一味違った実践的取り組みに目を輝かせながら熱心に取り組んでいました。



### ○まちづくり提案

ワークショップ最終日に開催された提案発表会では、各高校の先生方や茨城県・常総市の職員、報道関係者等が参観する中、神達岳志常総市長に対し、見事なまちづくり提案のプレゼンテーションが行われました。

「遊ぶ場所がないから若い人は寄り付かない」、「単発のイベントはあるが日常的に人を呼び込む場所も仕組みも無い」、実際に市が掲載しているSNSの文章を例にとり「市はPRが下手」、「こんなに空き家があるのにどうして活用しないの?」等々、行政としては耳が痛いのですが、的をついた問題点が多くあげられました。一方で、豊富な農産物、豊かな自然、数々のイベント、観光スポットなど、市域に秘められたポテンシャルを的確に拾い出し、それらの資源を組み合わせることで高校生ならではのエッセンスを加え、市に人を呼び、活気を生む様々な仕組みを提案してくれました。

なお、これらの提案は、その後一般公開の形で開催された「常総市復興祈念まちづくりシンポジウム」と「筑波大学高大連携シンポジウム2016」でも披露され、会場からは共感の顔つきと笑い、そして最期に盛大な拍手をいただきました。

日	場 所	内 容
8月8日	筑波大学・常総市	ワークショップ
8月9日	常総市役所	ワークショップ
8月10日	常総市役所	ワークショップ、提案発表会
9月9日	常総市役所	ワークショップ(提案ブラッシュアップ)
9月10日	常総市地域交流センター	常総市復興祈念まちづくりシンポジウム
11月5日	筑波大学	筑波大学高大連携シンポジウム2016
12月11日	常陽藝文センター	茨城県地方創生政策アイデアコンテスト最終審査会

### ○茨城県地方創生政策アイデアコンテストへの応募

先にも述べたように、高校生への共通テーマには“科学的な分析手法を交えながら”という条件を付してあります。そのようなことから、高校生は、各チームのファシリテーターとなった大学生の指導のもと、RESASを使って市の状況をデータの的に把握・分析しながら、提案をまとめていきました。

そして、これら8つのチームの提案を茨城県地方創生政策アイデアコンテストに応募したところ、2つのチームが1次審査を通過し、最終的にそのうちの1つのチームが最優秀賞を受賞しました。

### ■事業の特徴・効果

今回の取り組みの特徴は、高校・大学・行政の三者連携事業という点です。「高校生の若い感性からの発想」×「大学の科学的な分析手法」×「行政の持つデータ・経験に基づく現場感覚・施策の実行力」、これらそれぞれの長所を生かすことにより、斬新なアイデアが生まれる可能性と社会実装の可能性が広がります。

また、高校生はPCを使ったプレゼンテーション技術の習得、大学生は高校生指導の実体験、行政は若者目線によるまちづくりのアイデアの獲得という、いわば“三方よし”の事業でもあります。そして、行政にはさらにメリットがもう一つあります。それは将来市を担うリーダーの育成です。この事業でかかわった生徒が将来本市に戻ってきて、まちづくりのリーダーになってくれるかもしれないのです。

### ■今後の展開

この度の取り組みでは、若者目線からの様々なアイデアが提案されました。財政事情が厳しさを増す中、アイデアをそのまま予算化することは難しいですが、若い世代のアイデアを行政の目線と創意工夫でカスタマイズし、「高校生提案をもとに創設された事業」として事業化できればと考えています。そして、その結果、まちが活性化し、最終的には交流人口や定住人口が増加すれば、まさに若者による主体的な地方創生の実現となります。

そのようなことから、この三者連携による取り組みを単年度で終わらせることなく、今後の地方創生への取り組みと関連付けながら引き続き実施するとともに、様々な形で発展させていきたいと考えています。

### ■おわりに

最後になりましたが、夏休みや休日を返上して常総市のまちづくりについて真剣に議論してくれた45名の高校生諸君、熱心にご指導いただいた筑波大学の太澤義明教授をはじめ大学生の皆さま、生徒の参加を多方面からサポートして下さった各高校の先生方に心から感謝申し上げます。

なお、本事業による高校生の提案は、常総市ホームページに掲載しています。是非ご覧ください。